圓藏寺新聞
大銀杏
おおいちょう

令和３年７月16日
夏 号　第10号
発行：日蓮宗圓藏寺

〒330-0054
さいたま市浦和区東岸町1-29
電話　048-882-2835
FAX　048-883-9848
Facebook・Instagram
浦和 円蔵寺　検索
公式HP　YouTube

日蓮大聖人のお言葉

人にたまたまあわせ給ふならば、むかいくさき事なりとも向はせ給ふべし。ゑまれぬ事なりともえませ給へ。

かわいどの御返事

日蓮大聖人のお言葉に触れ、日々の生活の指針を求めたいと思います。このお言葉は、弘安３年(1280年)大聖人59歳の時、信徒へ送られたお手紙の一説です。身の処し方、対人関係を良好にする秘訣などをお説きなされています。

先日、通行許可の申請のために浦和警察署に行きました。対応して下さったのは女性の警察官でした。もちろん、職業柄致し方ないことかも知れませんが、大変失礼ながら、また勝手なイメージで、どうしても警察の方は高圧的かつお役所的対応をされるイメージがありました。しかし、この対応をしてくださった警察官は良い意味でフランクであり、こちらの要望や質問にも丁寧に応えて下さいました。おそらく、一日通じて警察署には様々な方が訪れるでしょう。なかにはクレーマーのように高圧的に来る方もいるかもしれませんが、きっとこの警察官はどなたに対しても笑顔で接し、相手の想いをしっかりと受け止めているのでしょう。

私自身、お寺という環境におりますから、お檀家様を始め、お参りの方、ご近所の方など沢山の方と日々接しています。素敵な対応に警察署を気持ちよく出た後、自分自身の日頃の振る舞いはどうであったかと……、猛省したことは言うまでもありません。

このお手紙では、大聖人が信者の方へ、対人関係を良好にする秘訣を懇切丁寧に教諭されています。「人に偶然会った際は、面倒に思ってもしっかりと対面しなさい。笑顔になれないような時でもあえて微笑みなさい。」とあります。まさに、警察官の誠実な対応を思い出す内容です。職業や年齢に関係なく、どなたであっても人に言えない苦労や悲しみを抱え、時には全てを投げ出したくなる事もあるでしょう。しかし、それをそのまま対面した人にぶつけるのか、または、大聖人が仰るように「あえて」笑顔で接するのか。皆様はどちらの対応が多いでしょうか。私は、謙遜でもなく、また僧侶であるにも関わらず、恥ずかしながら前者のケースばかりではと反省致します。

辛いときでも笑顔を作ると、自分自身の心も笑顔になるというデータがあるそうです。もちろん、辛いときにしっかりと泣くことも必要です。しかし、その笑顔は、きっと周りの方はもちろん、自分自身の人生をも豊かにしてくれる事に繋がるのでしょう。

（良海）

いろはに円蔵寺②

当山の縁起、本堂と寺宝「満願祖師」

※円蔵寺の歴史については、現在も調査中のため、近年見つかった資料をもとに記していきます。あくまで資料をもとにした推測を兼ねた報告となりますことをご容赦下さい。今後も引き続き調査を続けてまいりたいと思います。

また、当山にまつわる情報・資料をお持ちの方は細かな事でも結構です。是非副住職までお教えていただけますと幸いです。先人達の想いを知り、皆様と共に今を生き、円蔵寺を次世代へと繋げていけますよう願っています。

○記録上の円蔵寺の縁起

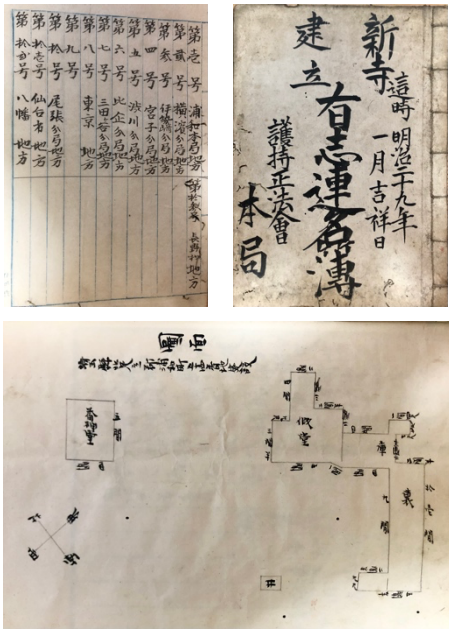
円蔵寺は、千葉県勝浦市にある長福寺の末寺として、日圓上人によって同地域に寛正三年（一四六二年）に開山されました。それからの歴史は不明ですが、明治二十九年に池上本門寺の末寺となり、明治三十年十一月に許可を得て、現在の浦和の地へと移転し今に至ります。その時の住職が、護持正法院日寛上人であり、当山の中興の祖とされています。

しかし、これは記録上の円蔵寺の移転・復興であり、残された資料等の年代を見るとこれ以前の明治十年前後のものも多数見つかっております。この点に関して、順に紐解きながら当山の歴史を見ていきたいと思います。

○「護持正法會」と「円蔵寺」

明治二十九年一月に作成された『新寺建立有志連名簿』によると、その頃まで、当寺は「護持正法會」と名乗り、本局をこの浦和の地に置き、分局として横浜・東京・群馬等（現在詳細を調査中）の各地にあったと記録されています。浦和近郊のみならず県内外に広く布教活動をされていたようです。また、この資料によると、明治十五年に仮本堂、明治十八年に庫裏、明治二十五年に番神堂を建設とあります。つまり、少なくとも仮本堂の出来た明治十五年には、浦和の地で「護持正法會」と名乗り布教活動が始まっており、明治三十年に正式に「円蔵寺」と名乗るようになった訳です。

あくまで推測ですが、勝浦にあった円蔵寺は廃寺に近い形になっていたのではないでしょうか。それを仏縁のあった日寛上人が寺号を引き継ぐ形で残したのかもしれません。この名簿の題が「新本堂建立」ではなく、「新寺建立」とある事も、単に円蔵寺が勝浦から移転したのではなく、場所を変えて心機一転新たに命を宿したお寺であるという意味合いが強いのかもしれません。実際、日寛上人を「開基」「一世」と記したものも見られ、これ以前の「円蔵寺」としての記録がないこともそれで説明がつきます。もし、純粋に勝浦から移転したのであれば、「護持正法會」としての時代はないはずだからです。

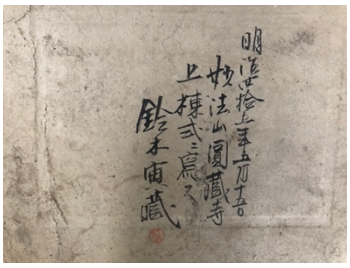


仮本堂があった際の境内の図面㊦。今と大きく違うところは「番神堂」があった事である。境内も今のように閉鎖的でなく、きっと多くの参拝者で賑わっていた事であろう。

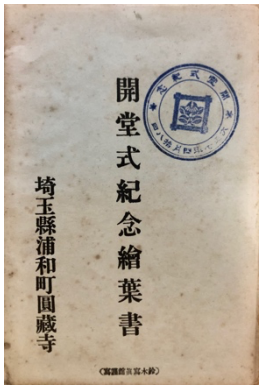
○新本堂の建立

さて、真相は今のところ明らかではありませんが、名称を「円蔵寺」とした明治三十年頃、檀信徒の増加により、それまでの仮本堂では手狭となってきました。そこで、明治三十三年より五年間の継続事業として新本堂の建立が計画されます。しかし、新本堂建立のための資材を集め着手しはじめますが、日露戦争や世情を考察し、終戦まで工事を中止し、建立を延期する事となりました。また、その頃農作物の霜害や水害等多くの災害に見舞われたことも関係しているようです。また、新本堂建立を計画していた日寛上人は完成を待たずして、明治四十一年に遷化（僧侶がお亡くなりになる事）されてしまいました。

長年の延期により、当初集めた資材も腐敗してしまいますが、日寛上人の遺業をどうにか継続しようと引き継いだ住職は、檀信徒総代と協議を持ち、明治四十三年より三年間を目標としてこの事業を継続する事としました。しかし、当初予定していた新本堂の図案通りに建立するには、多大なる資金を要したため、規模を小さくして概ね当初の図案に従う形で進めていく事となります。その後、明治四十五年に上棟式を行っている記録があった事から、大正初期に現在の本堂が完成に至った事が推測されます。『開堂式紀念繪葉書』には、「大正七年四月十八日」と印が押されてあります。



新本堂建立にあたっての上棟式の時に撮られた写真と考えられる。現在の立派な本堂を作り上げてくれた職人の方々であろう。多くの方々に支えられてのお寺であることを改めて感じる。



３枚セットの繪葉書が記念に作られた。
㊤本堂と中興の祖・日寛上人
㊧番神堂と参籠堂　㊨庫裏

○「満願祖師」への信仰

本堂中央に祀る祖師像（日蓮聖人の座像。三尺三寸＝約一ｍ）は、遡ること明治十四年の日蓮聖人六百遠忌の祈念佛として建立されたとあります。ですので、新本堂で新たに祀ったのではなく、おそらく前述の明治十五年仮本堂建立の際に安置され、新本堂でも引き続き祀っていることが推測されます。明治三十年と日付のある資料には、新本堂建立のためにお題目を認め、祖師像の御服内へ納めたとあります。また、檀信徒に十五日間続けてお参りをし、それが満願した際にお題目の下へと氏名を記載することを勧めています。これにより、現世安穏・所願満足・死後に迷うことなく霊山浄土へと歩みを進められるよう祈願しました。

大きさが全てではありませんが、全国的にもこれだけ大きな祖師像はなかなかございません。明治十五年の仮本堂建立以来信仰を集めてきたこの祖師像に願をかける形で当時の人々は新本堂建立完成を願ったことでしょう。現在、この祖師像は大きな逗子の中に祀られております。大法要時やご信仰ある方にお参りいただいた際にご開帳させていただき、その謂われから「満願祖師」と名付け、多くの方々が熱心に手を合わせてくださっています。

○現代の円蔵寺

昭和三十五年六月十二日、円蔵寺では「正法会」と称する会が発足致しました。ここでは、月に一度大法要を行い、毎月『正法新聞』を発行するなどして信仰を深め、会員同士の親睦を深めていったそうです。残念ながら、時代の変化と共に三十年以上前に一度なくなってしまいました。しかし、先人達の想いを引き継ぎたいと願い、令和元年七月八日、日寛上人のご命日より「正法会（お経の会）」という形で月一度の信行会を開き、円蔵寺新聞『大銀杏』としてこのように年四回の新聞をお届けしています。

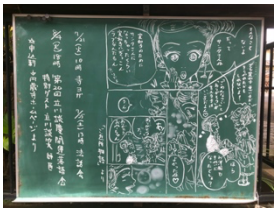
時代によって考え方や布教方法は少なからず違う事でしょう。しかし、先人達が大切にし、地域の人々の憩いの場、そして何よりお題目を発信する道場としての役割は変わることはありません。その中心には、常に「満願祖師」がいてくださり、力強い日蓮聖人のお姿とともに喜びも悲しみもかみしめながら人々は歩んできた事でしょう。これからもそうしたお寺でありますよう、皆様とともに円蔵寺再興の灯火をかかげていきたいと思います。

現在の本堂。「満願祖師」を祀る須弥壇とお厨子。須弥壇の細部には彫刻があり、当時の職人方の技量と想いを感じずにはいられない。大切に護っていきたい本堂である。

本堂内陣の写真。現在毛氈(赤い絨毯)がある部分は、板張りで周りより一段低いように見える。新本堂が出来た大正初期の頃の写真と考えられる貴重な資料である。

○番外編

円蔵寺入口に面した通りは、浦和駅に通じる道でもあり、多くの人が行き交う通りです。そこに設置している黒板。ここには、これまで各種行事の案内を書いていましたが、コロナ禍で中止が相次ぎ、書くことがなくなってしまいました。そこで、この未曾有の時代に、道行く人がちょっと立ち止まって笑顔になっていただけたらと願い、漫画等のイラストを昨年より描いています。有り難いことに、これをきっかけに円蔵寺に興味をもってくださった方が増えているようです。子供からおじいちゃんおばあちゃんまで、自然と立ち寄り、休み、気付きを得て、今日を生きる。そんなお寺になりますよう小さな事からコツコツと続けていきたいと思います。イラストネタも募集中！



大感謝のご勇退！

田辺 弘 様

御年 88 歳であることを忘れてしまうほど、いつも元気で力強い田辺さん。苦労を知っているからこその笑顔が素敵です！

これまで円蔵寺を支えてくださった田辺さんがご勇退される事となりました。昭和八年、新潟県生まれの田辺さん。十八歳で大工見習いとして地元で学び、その後、東京品川区の工務店に務め、長く大工として活躍をされました。当山とは、十三年前にシルバー人材センターを通じご縁をいただき、主に境内清掃をお願いしておりました。

「せっかくお参りいただくお檀家様に気持ちよくお参りいただきたい」と、その仕事ぶりは実に丁寧で感謝の言葉しかございません。特に、台風等の次の日には朝一からお寺に駆けつけてくれ、お参りの方が来る頃にはすっかり綺麗にしてくださいました。「昨晩、この雨と風でお寺が心配でしかたなかったよ」と笑いながら仰っていた姿を思い出します。

副住職が円蔵寺に来るまでは、先代住職の奥様とお話をされながらご一緒に庭掃きをしたり、お盆の卒塔婆をご一緒にお墓へ建てにも行ってくださいました。また、大法要の準備や交通整理、さらには、大工の経験を活かし、賞状を収納する額（客殿廊下に設置）を作製、原山墓地の図面を作製と実に多岐にわたりお寺を支えてくださいました。

境内清掃中には、お参りのお檀家様が励ましてくれたり、行事の時にはお話をする事も楽しみの一つであり、感謝しておりますとの事です。

職人気質のお人柄、誰よりも責任感があり、豊富な人生経験から本当に多くの事を学ばせていただきました。大切にされてきた事を改めてお聞きしますと、

・努力、正直
・年上の人を敬う
・年下の人を可愛がる
・うぬぼれは絶対にしない
・悲しい事、嬉しい事を分かち合う友を沢山持て
・失敗は成功のもと
・自信を持つ、度胸を持つ

まさに有言実行の方であろうと田辺さんにお会いした方の共通認識ではないでしょうか。

「人間は心ですから」と笑顔で話してくださった田辺さん。暑い日も寒い日も雨の日も雪の日もどんな時でもお寺の為に力を注いでくださいました。言葉だけでとても感謝を表せませんが、これから円蔵寺を盛り上げていく事で恩返しをしていきたいと思っております。

これから寂しくなりますが、是非またお寺に遊びに来て下さい。叱られないように、その大きな背中を思い出してしっかりと精進致します。田辺様本当に有難うございました。

談慶の「信じていますか？」 第2回

今や私、円蔵寺さんでの「開運落語会」は、隔月開催が定着しその数も二十五回を超え、毎月伊東の朝善寺さんから送られてくる「月守り」は肌身離さず携帯し、そしてこのコロナ禍でこの二年はお伺い出来てはいませんが数年前からの七面山登詣も毎年励行するなど、日蓮大聖人さまとはとても深いご縁で護られていることを実感しています。

元々は、今は亡き師匠談志の熱烈な「信者」である長崎は島原の護国寺の住職、岩永泰賢上人からの繋がりでした。岩永上人は我々弟子以上の「談志マニア」で私は二十年以上も前からご厄介になっています。あれはちょうど長男坊がカミさんのお腹に宿った時でした。まだようやく前座をクリアしたばかりの二つ目というランクで、仕事も少なく「どうしようかな」と真剣に悩んでいた時のことでした。岩永上人が、「立川流の若い落語家を使って、日蓮宗立教開宗七五〇年のイベントを打ちたい」と師匠に申し出たのです。さらに師匠が「煮るなり焼くなり勝手にしていい（笑）」と許可してくれたものですから、「では、つきましては日蓮大聖人様がその教えを弘めるに至る法要劇を演じる役者として使わせてもらいます！」と話がいきなり進みました。私は「安房小湊の漁師」役をいただき、「狂言回し」として語り部を務めさせていただきました。大聖人様役の兄弟子、ほか弟弟子二名と四名でユニットを組み、法要劇の後は、ドウランを落として着流し姿になっての本業の落語をやるというスタイルが非常に好評で、全国の日蓮宗のお寺さんを四十軒以上からお声がけいただいたものでした。そのおかげで無事長男坊の出産費用とその後の養育費も授かることが出来たのです。まさに岩永上人が談志とその弟子たちを信じ、談志が弟子を信じ、そして我々を日蓮宗のご住職各聖が信じてくれたからこそでありました。

今年おかげさまで長男坊は十月に二十歳になります。今大学でお笑いサークルに所属し、青春を謳歌しています。まさに仏縁に感謝。お導きに深謝。

落語立川流真打　立川談慶師匠